

〔特別寄稿〕

ナイチンゲールのタマゴと格闘して

宮 近 スイ子*

小春日和の柔らかな陽射しが暖かい11月29日の午前である。私は1限目の授業を終えた2年生の学生達と継体天皇陵のそばにある短大の校舎から朝日に輝く銀杏の美しさに見とれていた。この原稿依頼を受けて以来、藍野学院の看護専門学校から短大化に至るその経緯と業績を縷述してみようかどうか迷っていた。その歴史や経緯は、現在学校や恒昭会グループにかかわり、またかかわって去った人達の足跡を辿っても如実に実感できる。そこで、私は雑感でよいと考えた。しかし、その雑感の中に私自身の教育姿勢が当然表現される。そして、昭和50年から2年余りとさらに平成2年10月1日から再就職し現在までを顧みるとこの稿の20年史の真っ只中に存在し、その歴史に直面してきた1人の教員として、たとえ雑感であっても、私自身自負と責任において本稿を書こうと決心したのである。

スパルタ教育と揶揄されながらも……

平成2年10月着任時、藍野医療技術専門学校看護学科1期生が1年時の後期を迎えたところであった。短期大学の3年課程が昭和60年に発足したものの、恒昭会関連病院の看護スタッフは減る一方で、3年制看護短大の卒業生は、精神科や老年看護には教員の看護の原点に対する不理解と学生への間違っただ指導の結果、官公立病院へ就職し関係者は慌てた。その結果再開されたのが平成2年に再スタートした定時制進学コースの課程である。定時制にしたのは看護職員の確保とレベルアップが大きな目的であったと推察する。

着任時のカリキュラムの段階は年明け早々に基礎看

護実習が控えていた。学生達の大多数が恒昭会関連病院で准看護婦として長期間働き、その平均年齢は確か36歳位だったと思う。週3日の授業と現場の仕事との両立は厳しいものがあつた。学問を追求する以前にすぐ解答を求める場面もしばしばあつた。自ら学習し研究する姿勢をいかにつけるかが課題であつた。反面がむしゃらな意欲は全ての学生が持っていた。その乱暴ともいえる根性をよい意味で教育に利用しようと決心した。その結果、定時制の1, 2期生は国家試験は全員合格した。その工夫の一つとして、先ず精神科看護実習に際し当然学生も病棟入口の鍵を所持できると彼等は期待していた。しかし、学生には鍵を渡さなかった。反発はあつた。だが、人間の基本的自由と権利を奪われた患者さんのことを考えさせたかった。学生達は、週3日の登校日以外は病棟で看護スタッフとして当然のように鍵を自由に所持できている。その延長が学校登校時も腰に鍵束を、じゃらじゃらさせているのを見て啞然とした。「俺とお前達はちがうんだ」という暗黙の差別を持っている限り精神科看護は成り立たない、と精神科看護経験のない私でも当然と考えていた。いかなる人間も精神のいや心の自由まで奪ってはいけないことを精神科看護経験の長い学生だからこそ考えさせたかった。学生達は実習時、病棟入口の鍵を病棟スタッフに頼んで開けていただく煩わしさと、人間として自由感を奪われた境地は自己を振り返るよい題材になった。種々の反発や抵抗はあつたが意に介しなかった。その後、平成5年から全日課程に切り換えた。定時制課程は学生には中途半端で学問を自らの意志とする環境に程遠いことを反省してのことだった。その結果、就学と仕事の両立が不可能になり年配

* 藍野学院短期大学副学長

者の入学が激減したのも事実である。全日制課程変更後から、学生の年齢層が若返った。高等学校衛生看護学科出身者がクラスの半数以上を占め、新たな学校運営のむつかしさが生じたものの、学校本来の教育らしくなってきた。

次に、研ぎ澄まされた良心と生命への畏敬の念をいかに育むかが高等学校衛生看護学科卒業生が増した結果、大きな課題となった。自己のアイデンティティも確立途上での精神の有様や価値観・職業観も未熟である学生達に藍野学院が目指す方向をいかに教育するかは難しい。言葉だけで人間は学習し、理解することは不可能である。日常の教育活動にどのように反映させねばならないか。人間は生まれながらにして両親をはじめ自分を取り巻く周囲の人々から「良心」を育まれ成長する。しかし長ずるに従い、生き抜くための要領や智恵や誤魔化す術、嘘の重ね方等を会得しながら生きる術を身につけざるを得ない。しかし看護の仕事、いや人間の生命を預かるこの仕事は誰もが持っている「良心」をより研ぎ澄ますことが要求される。私は学生に解りやすく「人が見ていようが見ていまいが変わることなく仕事ができること」看護の場面は患者さんと一対一の場面が多い。患者さんは看護者に全幅の信頼をもって自分の命を任せている。フローレンス・ナイチンゲールはその著書「看護覚え書」の「からだの清潔」の項で『病人の身体を不潔なままに放置したり、あるいは病人に汗やその他の排泄物が浸み込んだ衣類を着せたままにしておくことは、健康をもたらす自然の過程を妨げて患者に害を加えることになるからである。それはちょうど身体にゆっくりと作用する毒物を病人の口から飲ませていると同じ結果になる』と述べている。

ご承知のように看護教育の最終目標は、指定規則に定められた教育課程を学修させ、国家試験の受験資格を与えることである。しかし、全ての看護教育現場の教育目標に「豊かな人間性を云々」と書いている。实际的に厚生省の指定規則の学科目だけで豊かな人間性を育むことは不可能である。よほど、教職員が一丸となって学生に向き合わなければ無理である。しかし、わが校はその成果をあげていると自負している。

その一つが、「第九コンサート」である。最終発表がプロとの競演である。「芸術」の科目単位設定で必修である。毎年1年生が出演しこれで10回目を終了した。どの回も成功した。プロの指揮者、ソリスト、楽団ともに学生のお遊びのみが目的であれば12月の多忙な時節に興行費を多額にしても続かなかったであ

ろう。皆が主旨に賛同し、少ない出演料で毎年一流の出演者がスケジュールを合わせて来ていただける。4月から25回余り、1回90分の授業でドイツ語で暗譜し合唱する。この事実を私達は感謝し改めて若者の持てる可能性の大きさと、それを引き出す環境の大切さを実感しないではいられない。そのほか、5月のナイチンゲール祭、7月のそーめん流し大会、花火大会、8月のバーベキュー大会、9月の敬老運動会、12月のやきいも大会（公孫樹の実を集めて、やきいもに添える）と卒業論文発表、3月の湖東三山の一つ百済寺お礼参りとすきやき大会、と盛りだくさんである。それぞれのイベントを一日を徹して行う。これらのイベントを通して何を学生に学ばせたいか、第1に本来の「ゆとり」を与えたい。先の指定規則の上にこのようなイベントをして学生はゆとりはあるのかといわれそうだが、昨今「ゆとり」の意味をとりちがえている結果が多く露呈されている。そこで第2に本物にふれさせたい、第3に集中力を涵養する、そして、全ての企画、運営の細部は学生に任せるが、大事な点は教職員と一緒に実施する。その活動から学生の個性、学年全体および学年相互の協調性、責任感、思いやり、やさしさ、真剣さ、物事の段取りの仕方、安全感、感謝の気持ち、達成感等が育まれてくる。食材を扱うイベントは徹底した清潔と場所の清掃、やきいもに至っては火災を防ぐ安全への配備と、1日がかかりでやきいも400本を焼き、そのうち350本はお世話になった方へ配る。病棟スタッフ、病院・学校の事務、ひまわり保育園の子供たち etc……、さらに今年も、熾で120尾のサンマを焼き、大根おろし30本、おにぎり1000個をにぎりあげ、皆、喜んで食べた顔で美味しくいただいた。

朝顔、ペゴニア、パンジーの栽培の手入れを通して、物を言わぬ生物をいかに大切に育てるか、草花に水やりをすることで、生物を大切にできると考えている。草花は人間が水を欠かさず与えることで、太陽の光を受け人間の愛情を感じて育つ。土・日も長期休暇も、一日も欠かさず学生達は水やりをする。草花さえ育てられない人間がどうして他人の命を守れようかというのがその理由である。

短期大学の周辺の植物が大切に手入れされ、水やりから四季折々の植換えが、学生達の仕事である。夏には、短大正門の大きなケヤキの木にアブラゼミの大合唱が鳴り渡る。時に夕刻にかけてアブラゼミのふ化を学生達は幼児のように童心に返って観察もする。

五感を働かせ、このようなイベントを一つずつ熟達

していく毎に、学生達の顔は引き締まり、凜として品格が生まれてくるのである。

神谷美恵子著作集を副教材にして

「なぜ、私たちでなくてあなたが？
あなたは代わって下さったのだ」

べつに理屈ではない。ただ、あまりにもむざんな姿に接するとき、心のどこかが切なさで申し訳なさで一杯になる。おそらくこれは医師としての、また人間としての、原体験のようなものだろう。心の病にせよ、からだの病にせよ、すべて病んでいる人に対する、この負い目の感情は、一生つきまとはなれないのかも知れない。

これは、神谷美恵子著作集「人間をみつめて」「Ⅱ らいととともに」の冒頭に出てくる詩の一部である。

著者は津田英学塾在学中に基督教の伝道者であった叔父に誘われて、多摩全生園を訪れ、はじめて らいの存在を知った。同じ世に生をうけて、このような病に苦しまなくてはならない人びとがあるとは、いったいどういうことなのか、心の深いところで自分の存在が揺さぶられるような衝撃を受けた著者は、できることなら、看護婦か医師になってこの人たちのために働きたいと 希 った。そして、周囲の反対にも辛抱づよく時を待ち、ようやく、医学部に進学を許されたその女子医専時代の夏休みに長島愛生園を訪ねて、「なぜ、私たちでなくてあなたが？ あなたは代わって下さったのだ」と冒頭の詩に書いている。現実生活の荒波や自身の病（結核）を乗り越えて、その初志を貫いた著者は終生実践活動に捧げた。らいであるだけでなく精神をも病む人びとにとって、著者のあたたかさで知性と努力がどれほど支えになったであろうか。

らいの人に

光うしないたるまなこうつろに
肢うしないたるからだになわれて
診察台の上にどさりとのせられた人よ
私はあなたの前にこうべをたれる

あなたはだまっている
かすかにほほえんでさえる
ああ しかし その沈黙は ほほえみは

長い戦いの後にかちとられたものだ

運命とすれすれに生きているあなたよ
のがれようとて離さぬその鉄の手に
朝も昼も夜もつかまえられて
十年、二十年、と生きてきたあなたよ

なぜ私たちでなくてあなたが？
あなたは代わって下さったのだ
代わって人としてあらゆるものを奪われ
地獄の責苦を悩みぬいて下さったのだ

ゆるして下さい らいの人よ
浅く、かるく、生の海の面に浮びただよい
そこはかとなく 神だの靈魂だのと
きこえよいことばをあやつる私たちを

ことばもなくこうべをたれば
あなたはただだまっている
そしていたましくも歪められた面に
かすかなほほえみさえ浮べている

私はこの詩を看護学科の入学時まもなく看護概論の授業で朗読する。いつもながら、朗読の最後には、涙が浮かんでくる。

らい（ハンセン病）は、既に感染しないと断定されたが、60年余り、人間としての権利を奪われ、離島に隔離された多くのハンセン病患者さんの苦難な足跡をニュースで見聞きしたのは3年程前である。

ハンセン病者のあいだにも精神病者に対する、誤解と嫌悪と差別があった。精神病であるために入園者や職員に嫌われてハンセン病の治療も精神医学の治療も受けることが出来ずに、放置されていた悲惨極まる境遇の人々を、この重みから手を差しのべようとする謙虚な筆で明瞭に描き出されているこの書物を学生に知らせたかった。

著者 神谷 美恵子氏の著作集10巻のうち、

1. 生きがいについて
2. 人間をみつめて
3. こころの旅
4. 存在の重み

の4巻を看護教育の副読本にして6年になる。

この著書を副読本にすることで、私は看護学生に、小山昭夫理事長が常々言われている実存主義に立却した「生ける接触」の意味を学生達に考えさせたかった。

先の精神科看護実習で病棟の鍵を学生から取り上げた理由もその一つである。鍵を持てる者と持てない者の限らない屈辱と諦めと失望の世界を鍵を自由に持てる者が深く考える機会にしたかった。学生たちから生々しい反省の声が多く聞かれたのを記憶している。学生自身の人間そのものの内実に迫る感想が聞かれた。その当時の学生（1, 2, 3期生）は、臨床現場で働きながら、学生生活を送った定時制の時代であった。人間はともすると日常性の中でも非日常性の中ですえも、マンネリ化するとその真実も見失ってしまう。その危険なサインを常に真摯に意識下に置くことが我々看護職には要求されることを改めて気付かされている。この教育姿勢は現在も貫いている。

奨学金制度に助けられて

恒昭会の藍野・花園病院、それと藍陵園病院が短期大学在学中の准看護師の資格を持つ学生に支えられていることは、周知の通りである。だが、私が言いたいのは、支えられているのは学校側であることを強調したい。

藍野学院短期大学看護学科2年課程の学生の2/3が目的意識を明確に持ち、契約とはいえ、病院アルバイトを月・火・木・金の夕方5時～8時30分のイブニングケア、そして土・日のいずれかの日勤業務、長期休暇の夏・冬はそれぞれ自分の意志でアルバイトし、寮費及び生活費を自身で得ている。学生達は、皆明るく素直で厳しい教育訓練にも果敢に挑んでいる。何故だろうと考えると、学校教育現場の関わりだけでは無理である。先に述べたアルバイトの時間は学生自身が主体的に活動出来る場であること、それは、患者さんの命と直接向き合う場であること、常に自身の看護者としての質的評価を受ける、その事実は学校で学習した抽象概念を具体化する場が常に持てること、即ち、人間として、職業人としての一定の緊張感と責任感と集中力を要求されること、そこには、喜びも同時にあること、さらに、1日24時間の時間管理が有効にできること。学生は自己を振り返り高い精神活動ができること、その上社会人のモラルも習得できる。即ち、小山昭夫理事長がアルバイトも教育の一貫であると主張している理由である。そして、最大の理由は、病院スタッフ全ての職種に渡って、奨学生を育む土壌が成熟していることである。奨学生2人に1人のプリセプター制度、そのプリセプターは、ほぼ先輩卒業生である。それも卒業年次の若い先輩が中心であること

から、学生との距離が近いこと、主任、師長はいうまでもなく、それを取り巻いて奨学生担当副部長も配置されている。

昨今、個人情報云々の理由で、看護教育現場で患者さんを受け持って看護実習を現場で体験するのが難しい状況にある。そのような中、我々の短期大学では、学生が患者さんをはじめとする多くの人々との接触で人間的にも成長してきている。

夕刻から消灯までの病棟はどの病院も忙しさは頂点に達している。夜勤ナースは患者さんを個別的にケアしたくとも、翌日の検査の説明と同意、又、1日の終わりを迎える患者さんへの就寝前のケアをきめ細かく行ってあげたいと思っても、現実には、ナースコールが鳴りつづけ「少しお待ちください」の連発である。

そのような時、奨学生が各病棟に3～4人ずつ配属されることで、病棟のマンパワーが確保され、病棟のあちらこちらから、若い学生達の明るい声が聞かれ、ケアも充足されると就寝前の患者さんの淋しい気持ちが一瞬でも軽減されるのである。ましてや、家族から離れて入院生活を送るお年寄りが孫や娘や息子のような学生に接することで一層の安堵感が得られるのである。19年度から開校予定の藍野高等学校衛生看護学科、青葉丘校の短大にもこの思想は何らかの形でつながりたい。それこそ、このことが医療看護の精神の本質であるからだ。

藍野のルーツをウィーンに訪ねて

「Saluti et solatio aegrorum」病める人々を医やすばかりでなく慰めるために。我々藍野学院および藍野グループの精神的支柱であることは周知の通りである。私は、この校章を仕事の時は、衿に着けている。どの洋服にも似合う、品格あるバッジである。盾を休めている型を成している。

この校章のルーツは、小山昭夫理事長が30数年前、藍野創設時ウィーン大学附属病院を寄贈したオーストリア皇帝ヨーゼフ2世のブロンズ像に書いてある言葉を我校の学是にしたのである。その由来と意味は聞き及んでいた。しかし、やはり、自分のルーツは、誰もがこの眼で耳で確かめたいものである。幸い、学院全体の将来展望も仙台の東北文化学園との合併も明確に視野になりつつあった10月藍野のルーツを辿ることができた。

ウィーン大学校庭に立つヨーゼフ2世が手にしたノートに我校の学是「Saluti et solatio aegrorum」

がそのノートに書かれてあるではないか！ 感動した。深い喜びと安心と何ともいえない誇らしさが胸中を駆け抜けた。

人間、自分を自分自身足らしめるものの本質と出会うとこのような感動が走るのかと改めて藍野を磐石にする礎の一人と成らんことを素直に誓った。

早速、この事実を含めた学校紹介ビデオの再編成を担当者に依頼した。

終 わ り に

今年も、短期大学1年生（3期生）の「第九コンサート」が盛況のうちに無事に成功した。学生達のあの達成感に満ちた清々しい顔を見る時、伝統を繋ぐ責任と誇りをいかに日常の教育活動に反映させるかが我々教職員に課せられていることを改めて痛感した。

2年生は、12/11・12の両日、藍野ホールで1年間の看護臨地実習で受け持たせていただいた患者さんの看護実践の事例発表である卒業論文発表も終えた。本物を体得さす教育活動に卒業論文発表時の抄録集をタコ糸を用いて、学生は手の平を赤くして和綴じをする。平成2年開校時1期から17年目になる。表紙は毎回ナイチンゲールの肖像をそのクラスで描いている。

あまりにも便利になりすぎた現在、日本古来の本の製本技術「和綴じ」を頑なまでに貫き通している。

発表後、最終的には、自己の原稿を製本収録し、その過程で3回文章校正を体験させ、出藍荘へ依頼し、卒業論文集と銘打って上梓する。既に、藍野大学助教授で短期大学社会教育学の非常勤講師である岸田秀樹先生が、卒業生796名の足跡を「卒業論文総目次」のタイトルで平成16年発刊し、さらに卒業生 奥野修一・菅沼美佐子・平瀬健吾の3名との共著で、内容分析を主旨に「卒業論文データベースプロジェクトの現状と課題」の第2弾の発刊も近い。

日々の教育活動が精一杯であったこの18年余りの我が看護学科の集大成をこのように客観的に纏めいただいたことに卒業生と教員にかわってお礼を申したい。

去る11月28日藍野病院正面玄関横にある大きなメタセコイヤにイルミネーションが点灯された。暮れか

ら初春にかけての藍野の風物詩の一つとなって4年になる。切っ掛けは、看護学科の奨学生が夜アルバイトを終え、帰寮する時少しでも癒されればと発案され、同時に「アゴラレストラン」も授業終了後、夕食も食さず、病棟へ駆けつけて消灯時までケアをする学生に安くて美味しい食事を夜9時まで開店してくれている。

現在では、患者さん、ご家族、近所の皆様、従業員も集う場所となり、名実ともに「アゴラ」集う広場になった。藍野大学の平成16年開学と共に、中央図書館の開館時間を朝7時から夜9時まで、日曜、祝日も学習に供するようにと小山昭夫理事長の方針で、心身ともに満ち足りた豊かな気持ちで、寒空の中バスを待つ学生の姿を見る時、学生を厳しさの中にも温かく見守る環境が一つずつ成熟し整えられる嬉しさを隠せないでいる。これが、藍野の精神風土であるのだ。

小山昭夫理事長が夢を抱いて実現した藍野大学も来年で完成年度を迎える。しかし、残念なことに、未だに基本的生活習慣さえ守られない学生達に事務官は朝から、タバコのポイ捨てを拾い、服装の乱れを注意し、横断歩道を横切るマナーを言い続け、図書館員は、携帯電話持込み禁止を守れない学生の多さに、日夜、振り回されている現実を直視^{はばか}しい訳にはいかない。

優秀な医療人を育成すると憚らず言い続ける学校教職員は何を指向するべきか そろそろこの20年の節目に猛反省すべき時がきた。

大阪と京都の中間に位置する北摂の丘陵に文化の香り高い藍野学院グループがある。教育、臨床、研究の3本柱を基軸に、患者さん中心にスピリットのある医療人が育成されている。そこには美術館、美味しいレストラン、音楽ホールがあり、四季折々の手入れされた植物が咲き、学生、教職員そして患者さんその家族も輪に溶け込んでいる。まるでイタリアのトリエステのような場所を、そんな夢を追いながら、その実現を目指して日々仕事に励む今日この頃である。

12月2日(土)に新たに短期大学前に小さなメルヘンチックなイルミネーションがお目見えし、学生が喜んでいることをお知らせして筆をおく。